



いのちの日便り

「世界一幸せな国～ブータンに学ぶ」

1月8日（火）の「一中いのちの日」では、校長先生から仲間とブータンを旅した人の旅行記を紹介していただきながら『本当の幸せとは何か』についてお話をいただきました。



今回、校長先生がブータンについて話をしようと思ったのは、2学期に校長室で3年生との交流給食を実施した時に、

「これから行ってみたい国はどこですか。」という質問があったからだそうです。その時、校長先生は「ギリシャ」と答えたのですが、この質問については、その後もずっと考えていたそうです。

そのような時に、ブータンを旅した人の旅行記を読み、ブータンの人々の考え方に感動し、そして、ブータンにも行ってみたいと思うようになったと同時に、生徒のみなさんにも、ブータンという国の人々の考え方を知ってもらい、『幸せとは何か』について考えてほしいと思ったそうです。

～ 生徒のみなさんの感想より ～

- 私も願うことはいつも家族のことだ。でもブータンの人は自分のことでなく、世界中の人々のことを願っていることがわかった。「幸せ」とは食べられることや学校に通えることだと思う。私もこれから世界中の人の事を願いたい。

（1年3組 阿部 凜那さん）

- 「周りの人が幸せだと自分も幸せ」という考えは、とても素敵だなと思った。そして、私は今年、そのブータンの人々の考え方に近づきたいなと思った。

（1年3組 菊地向日葵さん）

- 校長先生のお話を聞いて、「幸せ」を見直すことができた。僕たちも毎日三食食べられているので、日本は幸せな国だと思った。ブータンには、いじめはないということを知ってすごいなと思うし、僕たちもいじめがおきないように、みんなで協力して行動していきたいと思った。

（1年4組 山澤 晴さん）

- 「世界一幸せな国ブータン」についてお話を聞いて、自分のことだけを考えるのではなく、第一に他の人のことを考えるブータンは、優しい人がたくさんいると思った。ブータンの人のように一番に他の人を考えられるようになりたい。

（1年4組 黒木 春那さん）

- 「ブータンは世界一幸せな国。それはなぜだろう？」と思ったが、お話を聞いてその理由がわかった気がする。ブータンの人たちは、自分のことよりも世界中の人たちのことや周りの人たちが幸せになれるようにと祈っている。そして、悪いことは恥ずかしいことだと学ぶことにあると思った。 (2年4組 明泉 和樹さん)
- 私は「無い」ものに目が行きがちで、「ある」ことが当たり前のように日々生活していると感じる。だから、そこに「ある」という喜びや「幸せ」を見つけて生活していきたいと思った。家族がいて、学校で学べて、生活ができています。そのことが一番の「幸せ」だと思った。 (2年4組 瀧井 志織さん)
- 「幸せ」という言葉の意味を改めて考えることができた。ブータン人は自分のことじゃないことを願ったり、思いやりを持ったりすることに驚いた。これからは学校、学年、学級を「幸せ」にできるようにしていきたい。 (2年5組 森谷 晃己さん)
- ほとんどの人が当たり前と感じている日常のことを「それだけで満ち足りて幸福に思える」と考えるブータンの人々は、すばらしいなと思った。私も、今はあたり前にしていることが、本当はどれだけ「幸せか」を考えて、日常を大切にしていきたい。 (2年5組 杉沼 麗さん)
- 今回ブータンのお話を聞いて、何気ない日常が一番大切なのだと思う。沢山のことを望むことで「幸せではない」と嘆いたりせずに、「小さな幸せ」を見つけられる人間になりたい。 (3年4組 櫻井 孝人さん)
- ブータン人は、日本人と違って、自分の幸せだけを考えるのではなく、国民や世界の人を一番に思っている優しい国ということがわかった。 (3年4組 早瀬 魁人さん)
- 「世界一幸せな国」と言われているブータンは、他国とは違う考え方を持っていると思う。精神的な豊かさが国に広まることで、全体が「幸せ」になっていくという考えを、私はもっと他国に伝えるべきではないのかなと思った。 (3年5組 庄司 玲音さん)
- 私たちは日頃、自分たちのことばかり考えて生活しているけれど、ブータン人は、世界中の人々の「幸せ」を願っているのだと知った。「いじめなんかしたら自分を好きになれない。」というブータンの男の子の言葉が心に残った。 (3年5組 小林 真子さん)

生徒一人一人が校長先生の話真剣に話を聴き、
『幸せとは何は』について考えてくれました。

ブータンの風は、この一中にも届いているように感じます。
総合文化部の生徒が飾ってくれた校長室前の生け花の横には

「幸福が訪れますように」

というメッセージが添えられていました。

